

お母ちゃんがかわいそうになった

一月二十六日 日曜日

お母ちゃんがかわいそうになった

何回となく、目が覚める。

しかし、その度に起きようとする気はなく、  
また、再び ふとんの中に頭をつっこみ、  
安らかな眠りにつく。

もう十二時は過ぎているのだろう。

しかし、依然 起き上がる傾向はない。

何時か知らない、目が覚め、

何の気なしに、英文解釈の本を手にとり、  
今日のところを和訳し、また、再び、目を閉じる。

それから再び、目が覚める。

今度は 昨日借りてきた物理の本を手にする。

暫くして、兄貴が上がって来て、  
自分の部屋に入る音がする。

まだ、母は僕が寝ていると思っていたのだろう。

しかし、隣の部屋から、コトコト音がするので、  
兄が僕が起きているのに、気付いた。

母が下から、「起きてる？」と尋ねた時、  
兄貴が自分の部屋の窓から顔を出して、  
「起きてる、起きてる。」と答えた。

それで、母も 「ついに起きたか。」と知る。